

阿賀の宝もん ★発掘レポート

阿賀野川の歴史や文化、人や暮らし、自然環境…
などを流域の未来に生かす取組を掲載。

NAMARA 新潟水俣病授業 高橋なんぐ



お笑い芸人 高橋なんぐさん プロフィール

1981年生まれ。新潟県長岡市出身。「吉本興業主催 全国お笑いコンテスト in 東京ドーム」優勝。お笑い芸人として数々の実績を残すと共に「お笑い授業」と銘打った独自の講演活動を展開。学校、教育関係での活動は1,700校を超える。中学時代のコンプレックス克服体験、2年半の世界一周体験などの経験も活かしたコミュニケーション方法を楽しみ語り口で伝える。NAMARA所属。
【レギュラー出演中】BSNラジオ「高橋なんぐの金曜天国」毎週金曜日 午前9時～12時00分



▲なんぐさんの右隣は、付き人の神田久子さん(五泉市出身)。それ以前は校長を務められた小学校の元教員で、授業で新潟水俣病を取り上げ、新潟県による新潟水俣病教師用指導資料の作成にも携わられた。なんぐさん曰く「僕が新潟水俣病にかかわるようになったのは、久子さんの影響が大きい。ただ、付き人なんだけどやけに存在感があって、なぜか移動時は僕が久子さんの荷物を持って……(笑)」

新潟お笑い集団NAMARA(ナマラ)に所属し、新潟県内外の学校へ日々お笑い授業を届ける高橋なんぐさん。実は、新型コロナウイルスの感染拡大が始まった3年ほど前から、新潟水俣病を小学生たちに伝える授業にも取り組まれています。

一つは、「新潟県立環境と人間のふれあい館 新潟水俣病資料館」の二日館長。もう一つは、阿賀野川流域市町の小学生と熊本県水俣市の小学生が、なんぐさん進行のリモート授業を通じて交流し、理解を深め合う取組です。

今回は、高橋なんぐさんがなぜ新潟水俣病にかかわるようになったのか、そこでどのような発見や変化があったのか、インタビューさせていただきました。

新潟お笑い集団 NAMARA 社会課題をエンターテインメントする、地産地笑のお笑い集団

これまでの新潟にはなかったお笑い産業を確立すべく、1997年の立ち上げからさまざまな活動を続ける。全国初の地方発信型お笑いプロダクション。ライブ活動、テレビ、ラジオ、イベント出演などのほか、学校での講演、企業・団体の研修会、その時々々の社会問題を扱った討論会など、多種多様な現場に笑いを通じて関わり、既存の「お笑い」のイメージにはなかった活動形態が話題を呼んでいる。

高橋なんぐさんが関わり、新潟水俣病を小学生に伝える2つの取組を紹介

どちらの取組も、「新潟県立環境と人間のふれあい館 - 新潟水俣病資料館 -」が主催する事業です。



水俣病発生地域間交流事業

▲新型コロナウイルスの感染拡大以降は、直接会いに行く交流が難しくなったため、なんぐさんが得意とする「参加型」授業を通じて、流域と水俣市の小学校間でリモート交流を進めています。



一日館長 お笑い芸人・高橋なんぐと新潟水俣病を学ぼう!

▲2020年から、ふれあい館の一日館長に就任。阿賀野川流域の小学校5・6年生の親子を対象に、なんぐ館長のわかりやすいお話や館内探索を通じて、新潟水俣病の学習を深めます。

—そもそも、なんぐさんがお笑い授業を始めたきっかけは？

なんぐ:ある中学校から、卒業する3年生に向けた生徒たちの出し物を指導してほしいとナマラの芸人たちに依頼があって僕が担当したクラスが一番笑いを取ったんです。その時に「ああ面白いな」と感じました。当時僕は金髪で、「金髪先生」なんて言われたりして(笑)

それから少しずつ学校からの依頼はあつたんですが、小・中学生から集中して話を聞いてもらえるように、途中から「ちょっと一緒にやろう」と子どもたちを僕の話に参加させたり、先生も突然巻き込んだりして(笑)、すごく盛り上がり、新たな一面が見えたり……。こうして「参加型・巻き込み式」のお笑い授業に変えてから、先生方の間で「コミ」が広がって、急に依頼が増えました。

お客さんから初めて「ありがとう」と言われて

なんぐ:そんな時、授業をした学校から電話があったんです。僕が舞台にあげた子が実は「いじめられっ子」でも舞台上で「きみ面白いなあ」と僕が一言ほめてから本人も急に自信がついて、周囲の見る目も変わっていったというお礼の電話でした。僕は僕で初めてお客さんから「ありがとう」と言われたのが嬉しくて……そこからこのお笑い授業にもつ



—その最初の心配をどうやって乗り越えられたのですか？

なんぐ:たまたま別件で、ある市の教育長にお会いしたときに相談したら、「教師というのは、わかってい

と力を入れてみようと、自ら積極的に展開していくよつになりました。

—そのお笑い授業ですが、最近SDGs(※)など新しいテーマも求められる中で、なぜ新潟水俣病に関わろうと思われたのですか？

なんぐ:僕の付き人である神田久子さんが元教員で、新潟水俣病にも詳しくだったので、彼女から勧められたのがきっかけです。

でも、最初は「まだ被害を受けて苦しんでいる方もおられるのに、僕みたいな関係者じゃない人が関わっても大丈夫かな？」という心配の方が大きかったですね。

人ではなく、わかっていて病をわかっていて……と聞かれたので、「わかりたい気持ちはあるんですけど、返答したら「じゃあ引き受けなさい」と背中を押してくださったんです。

被害者は特別な人々ではない

なんぐ:それから阿賀野川流域の現地スポットを巡って学んだり、被害者の方のご自宅にうかがって、貴重なお話も聞かせていただきました。

自分の頭の中にいったん新潟水俣病のアンテナが張られると、新聞に毎日のように記事が掲載されていることにも気がついて、その切り抜きを集めるなどの勉強を進めながら、新潟水俣病の授業にのぞんだんです。

—最初の頃と比べて、新潟水俣病に抱いていたイメージは変わりましたか？

なんぐ:最初は特別な事件だと気負ってて、そつやすやすと足を踏み入れちゃいけないのではと身構えていました。

ただ、被害者の方々が集まる場でお笑いライブをする機会をいただいて、緊張しながらお会いすると、皆さんいたって普通のおじいちゃんおばあちゃんだったんですね。私

のラジオ番組のリスナーさんもいらして、「いつも聴いているよー」なんて声がけしてもらって(笑)。

そこから、「被害者の方々は特別な人々」ではない「魚をとって食べる」という普通の人々の、「日常の延長」で起きた事件なんだ「誰にでも起こっていた可能性がある」と僕の中でイメージが変わっていきまし

—一方、授業を受ける含の子どもの印象はどうですか？

なんぐ:僕と違って先入観がなく、知識としてスルッと受け入れる「入りが良い」という印象です。これは今の子どもにとって、公害は身近ではなく遠くなった、良くも悪くも、自分事ではなくなったこと、もしかしたら表裏一体なのかもしれません。

「昔話」だけではなく、「今話」だけでも伝えたい

なんぐ:でも、新潟水俣病って実は、イジメでも自然環境でもSDGsでも、お笑い授業のどんなテーマにでもつなげるお話で、僕の中ではむしろ昔話ではなく「今話」としての面が大きいんですね。新潟水俣病「を」学ぶのが昔話だとすると、新潟水俣病に「学」ぶのが「今話」に相当するのかな。だから今後は「昔話」だけでなく「今話」としての面も伝えていきたいんです。



被害者の方も「若い人に関心を持ってもらうことが嬉しい」と仰っていたので、今後もアンテナを張り続けて、僕が知った「昔話」や「今話」を少しでも伝えていく役割を担えれば……。そつすることで、新潟水俣病に抱かれる特別なイメージも変えていきたいですね。

(※SDGs…「持続可能な開発目標」を意味する英語の略称。詳しくは2ページ目の下段を参照)